川崎賢子（清華大学日本研究センター客員研究員）

連載 32 エルンスト・ルビッチ『メリイ・ウィドウ』あふれてやまぬ機知とユーモアとエロティシズム

お正月なので少し気分を変えて、エルンスト・ルビッチ（1892 − 1947）監督のオペレッタ映画『メリイ・ウィドウ』を観る。

日本での封切は 1935 年。同年 5 月 1 日号『キネマ旬報』の「各社試写室より」では飯田心美が次のように書いた。

> いつか本誌の監督座談会で伊丹万作氏は、自分の尊敬する外国監督の一人に此のルービッチュの名をあげ、此の人のゆたかな機知、ウィットを賞讃してゐるやうだつたが、恰もその言葉に応じるかのやうにルービッチュは持ち前の機知を此の映画では各場面に於て縦横無尽にぶちまけてゐる。それは、まるで滾々（こんこん）としてつきない泉のやうであり、それらを時と場所に応じて煥発的に繰り出すさまは奔湍（ほんたん）の飛沫にも似てゐる。

機知を「ぶちまけて」とはいささか乱暴であるが、「滾々としてつきない泉」「奔湍の飛沫」といった、水のシンボリズムでこの映画を語ろうとする飯田の気持ちはわからないではない。文字通りみずみずしく、エロティックでもあり、ゆたかで、情感がつきない。

『メリイ・ウィドウ』は一世を風靡したオペレッタの巨匠フランツ・レハール（1870 − 1948）の名作である。ヨーロッパの架空の小国 ── 映画冒頭では画面を拡大し、さらに虫眼鏡で探して、ようやくその位置と名前が探りあてられる ── は、結婚後ほどなく夫に死なれ、莫大な遺産を相続したウィドウ（未亡人、ジャネット・マクドナルド）の収める巨額の税金を頼りに国庫が回っている。ところがパリに移り住んだ彼女のもとには求婚者がひきもきらず、母国の大公は気が気ではない。同国人と結婚させるべく、色男のダニロ（モーリス・シュヴァリエ）に白羽の矢を立てたが……。恋の鞘当て、好きなのに愛想尽かし、艶笑話、あれこれ顚末があって最後はハッピーエンドである。ふたりには「終身結婚刑」の処刑命令が下される。

ブロードウェイのスターであったジャネット・マクドナルド（1903 − 1965）も、シャンソンの名手であるモーリス・シュヴァリエ（1888 − 1972）も、自在に、

『メリイ・ウィドウ』（1934 年）
ソニア役ジャネット・マクドナルドとダニロ役のモーリス・シュヴァリエ（『キネマ旬報』1935 年 4 月 21 日）

洒脱に、また朗々と、レハールの旋律を歌いこなす。クラシックではなくミュージカルの唱法である。

機知とユーモアとエロティシズムの妙技は、ルビッチ・タッチと呼ばれた。虫眼鏡でなければ発見されない小国のありようや、その小国の公妃とダニロの姦通とその露見の経緯、花のパリはマキシムの 2 階の「個室」で展開される情事の慣習など、『メリイ・ウィドウ』のいたるところにルビッチ・タッチがほどこされている。

ベルリンに生まれたユダヤ系のルビッチ監督は、「アメリカの恋人」と呼ばれ、谷崎潤一郎『痴人の愛』にも言及されたメアリー・ピックフォード（1892 − 1979）に慫慂（しょうよう）されてアメリカに移住し、ハリウッドにユーモアをもたらしたとも言われる。ルビッチ・タッチに影響を受けた日本の映画人として、現在、筆頭にあげられるのは小津安二郎である。

色男ダニロの姦通や自由恋愛の奔放さに関しては、さすがに 1935 年当時の日本では検閲の鋏がふるわれたのではないかと伝えられている。試写室を出て、封切の映画館では、どのような『メリイ・ウィドウ』が観られていたのかは、つまびらかではない。検閲でかなり摘まれた、それでも、観客は甘美なオペレッタ映画に魅了された。